

不安の
世紀から

Hemmi Yō

辺見 庸

不安の世紀から

江苏工业学院图书馆
藏书章
Hemmi Yō

辺見庸

脚注解説協力／田中祥之（中央大学講師）

小島 亮（元リトアニア国立大学助教授）

本文写真提供／毎日新聞社

ロイター・サン

UPI・サン

CNN・サン

不安の世紀から

平成9年1月30日 初版発行

著 者——辺見 庸

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

〒102 振替 00130-9-195208

電話／営業部03-3238-8521

編集部03-3238-8451

印刷所——旭印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本は小社角川ブックサービス宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取替えいたします。

©Yō Hemmi 1997 Printed in Japan

ISBN4-04-883446-0 C0095

不安の世紀から
目次

はじめに

5

I	内なるオウム、外なるオウム	ロバート・ジェイ・リフトン	17
---	---------------	---------------	----

オウム真理教事件の謎／地下鉄サリン事件の現場から／ダブリング／
ハーメルンの笛吹き男／戦後日本人が失ってきたもの／
現代社会の三つの歴史的傾向①シンボル体系の崩壊
②世界滅亡の脅威③マスメディアの革命／
若者がオウムに魅かれた理由／現代人の不安はどこから来るのか

II	メディアと想像力	ロバート・ジェイ・リフトン	61
----	----------	---------------	----

戦後五十年で日本人の精神にもたらされたもの／プロテアニズム対原理主義／
プロテアニズムとメディア／私たちのなすべきこと

III	記憶の噴出、記憶の抹殺	ファン・ゴイティソーロ	107
-----	-------------	-------------	-----

私たちが生きている世界の現実／和平協定はなにを意味しているのか／
記憶殺し／なぜ人々は破壊へと向かうのか／

なぜ知識人は行動しなかったのか／人類は進歩したか

IV

ゴドーを待ちながら　フアン・ゴイティソーロ

153

砲弾下での文化的抵抗運動／不安の時代に人はなにを待つのか／迷いの時代に私たちはどこに向かうのか／芸術・文化は人々になにをもたらすのか／都市のエスプリとコスモポリタン／記憶生かし

V

オウム事件とメディアの荒廃

193

そして、また同じようなことが……／一九九五年三月二十日・東京／パック・ジャーナリズムへの道／イメージが論理を無力化する／メディア・ファシズムの「良識」／不可視のマインド・コントロール／異端排除へ向かう悪の象徴探し／身体に合った言葉を取り戻すために

あとがき

226

解説——イナーシア（慣性）の解体に向けて　芹沢俊介

233

装画 倉田角次

はじめに

対談を始めるにあたり、『不安の世紀から』というテーマの解題のようなことをおきたいのですが、不安という心象を説明するぐらい難しいことはありません。精神医学によると、対象のない恐れを感じて不安というそうです。恐怖には特定の対象があるのに対し、不安の対象はいわば「無」なのです。また、近代の哲学者たちの考えによれば、不安とは、人間の根源的気分なのであり、これは実存の持つ本質的矛盾に根ざすのだといいます。つまり、必ずしも時代状況のいかんや特定の事件により生まれるものではなく、人が世界という他者と出会う際の避けられない気分であり、人間存在のありようの本源自体に不安が漂うというわけです。

そうかもしれません。しかし、この対象の判然としない不安という名の気分が、なぜか、二十世紀ももう少しで終わろうとしている近年に、特に色濃くかつ深刻になっていることも否定しようのない事実だと思うのです。それは、世界規模の精神の陰りのようにも見え

ます。たとえばいうなら、青黒く腥い、巨大な鱗のごとき影、あるいは魔女の濡れた髪の毛、ないしは黒一色の津波の夢のような漠たる不安が、かつてよりもっと禍々しく世界中に、そしてわれわれの内面に、ゆらゆら揺曳してはいないでしょうか。

英語の *angst* が不安という意味にあたりますが、この *angst* の語源は、ギリシア語の *angor* なのだそうです。 *angor* とは「狭くなること」。自己が外界に圧迫されて、狭く、窮屈になり、息苦しくなる。それがどうやら、不安という心象の原形であると推察されます。すなわち、そこはかとな不安感の発生源には、心の閉塞があるようです。それにしても、得体の知れない息苦しさ、胸騒ぎ、不祥の予感……このような感覚を訴える人がいまなんと多いことか。

東西冷戦の終焉と相前後して、われわれは社会主義という象徴的な価値体系が音を立てて崩れ落ちるのを目のあたりにしました。今世紀最大の思想的実験の無残な敗北がだれの目にも明らかになったのです。それは、しかし、平和の到来も、いわゆる「資本主義の勝利」も導きだしてはいません。政治、経済を超える人類社会の内面の問題としては、大いなる象徴の喪失、すなわち、価値一般の陥没、対立構図の拡散、あらゆる理念への不信感

という、表面は平穩に見えながら、そのじつ羅針盤が壊れてしまったような、心穩やかでない奇妙な精神状態をつくりだしてしまいました。

この集団的精神状態はどこか「失意」にも似ているように思われます。集団的失意というのが、世紀末現在における世界の全般的心象なのかもしれません。なにしろ、社会主義をなにより憎悪し、敵視することをもって自らの存在証明としてきた者たちにとっては、対象の消滅により、自己証明が不可能となつてしまつたのですから。資本主義という、本質的には「主義」なき価値法則もまた、いわば反法則的な社会主義があればこそ有効性を示しえていたわけですが、それがなくなつたいまは、資本主義本来の病理がかえつて浮き彫りになり、自らの改変を迫られているともいえましよう。

一方、社会主義の理念を心の拠^より所としてきた者たちにとっては、プロレタリア革命も、階級なき社会も、等しく豊かな社会も、諸民族の解放も、すべてうたかたの夢としてついえ去つただけではなく、現実の社会主義国の醜悪なまでの腐敗、強権支配、非人間性、無秩序、驚くべき非生産性が、すべて白日のもとにさらけだされてしまつたのですから、失望の深さも知れるというものです。歴史上の一大変化というのは、かりにそれが他国のこ

とであれ、われわれの内面の色合いをも、けだしくも、劇的に変えるものなのかもしれません。いや、歴史とは可視的外界のできごとというより、人間集団の、不可視の内面の変化をいうのかもしれませんが。

ともあれ、冷戦構造の崩壊により、価値にも意味にも、もはや境界がなくなり、敵の所在、味方の所在もひどくあいまいになってしまいました。正邪善悪を分かたず壁が見えないのです。理念、理想という言葉が、これほどまでに重みをなくしている時代はありません。いや、言葉そのものが有効性を失ってしまったかに見えます。絶対的な敵はいない。とりもなおさず絶対的味方もない。頼るべき思想も物語も言葉もない。絶大な英雄もない。人類がかつて経験したことのない、こうした新しい状況そのものが、よるべない不安、しづまらない無常感を生んでいるのかもしれませんが。

私とはいったい何者であるのか。これからどこに赴こうとしているのか。私は本当に眼前の世界に受け容れられ、そこに所属しているのだろうか。私が生きる意義、目的とはいったいなんなのか……。この種の、いわば「実存不安」も、過去のどの時期よりも広く蔓延しています。思想や理念になりかわり、資本とテクノロジーが人々を自信たっぷりに支

配しているいま、そして人類史上最も物質的に豊かであるといわれるいまにして、人はじつのところ、不安という根源的気分にかかてないどころか、正体のはっきりしない不安に押し潰つぶされているともいえます。

私はかつて、世紀末現在について、ため息まじりで次のように書いたことがあります。

現代とは、醒さめて正視するならば、まことにやっかいな時代である。たえていうなら、それは、進歩が退歩を意味し、逆に、退歩こそ進歩でもありうるような迷宮に似ている。あるいは、合理が不合理に見え、その逆にも見える幻の大伽藍だいがらんにも似ている。この迷宮、伽藍では、当方の豊かさが彼方かなたの貧困を意味し、こちらの飽食がこちらの飢餓を導き、平均寿命の高まりが自殺・事故死亡率と並行するだけでない。すぐれた頭痛薬や精神安定剤の発明と大量生産が、なんのことはない、おびただしい頭痛症候群と精神の不安定を前提としているような、悲しいアポリアに満ち満ちているといつてもいい。

今世紀が生んだ過剰発展社会の表層に容易に自己を同化できる者たちを別にして、数多くのまつろえぬ者たちにとって、神Ⅱ裁定者なき時代のこうした両義性はときに苦痛

以外のなにものでもない。アンビヴァレンツの迷宮、幻の大伽藍に住まうかぎり、自らの価値も引き裂かれ、自己分裂化せざるをえないからである。（河邑厚德、林由香里著『チベット死者の書』NHKライブラリー版解説より）

私はこの文章で、今日的不安のわけを私なりに解いてみようとしたのでした。仔細に見れば、世界はいま、両義的な、あやかしの風景に満ち満ちているのであり、うっかり両義の一方のみを信じるなら、ものの見事に足をすくわれかねない。そうした抛り所のなさも、具体的対象のない不安という心象を日々醸成しているのだと思います。おそらく、私たちは心根のどこかで、騙し絵やあやかしの風景などではなくて、万人が等しくひれ伏してしまうような絶対真理を開示されたがっているのではないかという気もします。少なくとも、それを開示できそうな力のある人物の登場を無意識に待ち望んでいるのではないでしょう。絶対真理などあるものかどうか、それを語る資格のある者などいるかどうかの穿鑿を忘れて、です。にもかかわらず、絶対真理はいつかな示されず、天声もまた聞こえてこない現状に焦慮し、不安はまたぞろつものという循環にいるのかもしれない。

冷戦崩壊後の価値の混沌こんとんのなかでは、テクノロジーを絶対真理や人間理性と誤解しがちですし、高度産業社会はその誤解と幻想の上になりたっているといっても過言ではありません。人間身体は、しかし、いかなるテクノロジーにも自己を完全には同化することはできず、むしろ、膨大な情報やときとともに姿を変えていく機器に対し生身の追いつかなさ、たちゆかなさを感じ、果ては矮小わいしょうなる身体、落伍らくぶしそうな自己をのみ意識させられるのが常です。まさに、先にご紹介したギリシア語の *angor* の感覚を抱くほかないのです。それは単にテクノロジーの千年王国によって植えつけられた幻覚にすぎないのです。が、ここから、不安という名の泡がふつふつと湧わきでてきているようです。

新興の宗教集団はこうした不安の蔓延をエネルギーの源としているように思われます。彼らの一部の者たちが提示した世界終末のイメージは、世人の漠たる不安を短絡的に結晶させたもののようにも見えます。新たな宗教集団は、いずれにせよ、不安症候群に陥っているこの社会を母胎として産まれでてきたものにほかならず、われわれにとつてまったくの他者ということはできません。むしろ、われわれはいま、存外に異様な自己の分身を眺めているのかもしれないとも私は思うのです。

ただし、葛藤^{かつとう}を引き受けず、苦悩を避けてなにごとか成就しようとするのも、不安なこの時代の新しい宗教のもう一つの特徴であるように感じられてなりません。たとえば、「わたしは幸いを望んだのに、災いが来た。／光を待っていたのに、闇^{やみ}が来た。／わたしの胸は沸き返り／静まろうとしない。／苦しみの日々がわたしに襲いかかっている。」（旧約聖書「ヨブ記」30章「ヨブの嘆き」より）といったヨブの嘆きを、ヨブになりかわり嘆き、とことわに問い、試練を受けつづけようとするような態度ではなく、大胆にも神になりかわり、ヨブの嘆きを不信心としてたしなめ、あげく刑事犯罪につながる途方もない託宣を下してしまう者が、近年相次いで登場しているのも、こうした葛藤回避と同根の傾向であるように見えます。私はキリスト者ではありませんが、不安なこの時代は、宗教にとっても思想にとっても、かなり長期の試練の時代であると考えています。

冷戦構造崩壊後にあらわになつた人類社会のもう一つの不安要因は、地域紛争、宗教・民族紛争の増大です。いまにしてみれば、米ソ二大陣営の冷戦と膠着^{こうちやく}的対立の構造とは、この構造を崩せば凄惨^{せいさん}きわまる事態になると予感したために、無意識に講じられた次善の策だったのではないかとさえ思えるほどです。あたかも世界規模の堤防が決壊したかのよ

うに紛争の奔流は手のつけられない勢いになりつつあります。それに伴い、難民の数も増えてつづけています。子供までが戦闘要員として駆りだされ、その多くが死亡しています。飢餓、貧困に苦しむ人々も減ってはいません。ヨブの嘆きを再び引用すれば、「わたしは幸いを望んだのに、災いが来た。光を待っていたのに、闇が来た」かのようです。

いま、世界各地で五十以上の武力紛争があり、そのうちの半分以上がニュースとしてはどこからも発信されていないともいわれます。チェチェン紛争、タタール紛争、アルメニア紛争、タジク・アフガン紛争、チベット独立紛争、イラク・クルド紛争、北アイルランド紛争、ルワンダ紛争……枚挙にいとまがありません。これらの紛争では、民族とはなにか、国家とはなにかといった、主として社会主義国では今世紀中葉までに解決済みとされてきた問題が、実際上は解決どころか、強権で少数者を抑えつけていただけであり、事態は悪化しつづけたことが明らかになっています。とりわけて、三年半で二十万人以上の犠牲者をだしたボスニア紛争は、一九九五年十二月、紛争当事者代表がパリで和平協定に調印してさしあたりの平和を達成したとはいえ、人類史の過去と未来を考えるうえで永遠に忘れることのできない教訓といえましょう。

この紛争では、あろうことか「民族浄化」という、第二次世界大戦でとくに葬り去られたはずの悪夢が再現し、三民族の指導者が、濃淡の差はあれ、それぞれ他民族を「他者」として、エスノセントリズム（自民族優越主義）に走ったために、共生関係にあった異民族の隣人同士までが憎悪をつのらせ、結果、同時代にこのような奈落^{なうろく}がありうるのかと目を疑わざるをえないほどの、血で血を洗う抗争にまで発展しました。徹底的破壊、集団虐殺、多数の女性へのレイプ……。そこでは、今世紀の支配的考え方であった国民国家という体裁も無力でしたし、民族自決という、これまで疑いもなく信じられていた「大正義」にいたっては、それを断行するならば、自民族のみの排外主義的正当化、正統化と紛争の拡大にしかつながらないという撞着^{どうちゃく}をもきたしたのでした。つまり、第二次世界大戦後の世界的常識がなにも通用しない事態に立ちいたったわけです。

日本からはるか遠い旧ユーゴスラビアのできごととはいえ、この紛争がもたらした負の教訓の大きさは計り知れません。問題の根を「民族差」にも「宗教差」にも求めることはできないでしょう。もっともつと根源的に、なぜに人間はここまですることができのだろうか、と問うたほうがいいのだと思うのです。つけ加えれば、今世紀に戦争と殺戮^{きつりく}を繰